手縄。帆桁の左右の端につけて、舳へ引縄、ひらくまきるなどの時、この縄にて、帆を自由にする者也、○中略

兩方綱。帆の兩方につけて舳へ引縄、船方、りやうほと云、是又帆を自由にする者也、

脇取綱。則兩方綱なれども、左右の下につけたる縄を云、

帆肩引（カタヒキノマタ）膜。兩方脇取縄、帆に付處を二筋とす、帆引の膜なり、又かへりまたとも云を、誤てかいるまたと云、

〔藩翰譜一水野〕勝成、○中略豊前の國に往き、黒田甲斐守長政に仕ふ、千石を領すと長政船に乗て、大坂に上るとて、勝成を召し、帆柱にまとひたる縄とけといひしかば、勝成おもふやう、如何に心は猛くとも、かゝるわざに慣れざらんものが、これほど走る船の檣に登る事なるべきや、奇怪なる事いふ人なると、腹だちけれども、辭せんもさすが口をしと思ひ、頓て攀ぢのぼつて、帆縄引ときて下りぬ、かく僻事いはん主に仕へん事益なしとて、その夜船の著たる所よりたち去る、

〔倭名類聚抄十一舟具〕苫　爾雅注云、苫（士廉反、和名度萬）、編菅茅以覆屋也、

〔類聚名義抄八艸〕苫（トマ）

〔伊呂波字類抄止雜物〕蓬（トマ）編竹葦覆舟也　苫同編菅茅覆屋也

〔倭訓栞前編十八登〕とま　神代紀、倭名鈔に、苫をよめり、船にふきて宿る物なれば、名くるなるべし、舟に蓬といひ、車に牽といふも同じ、説文に、苫、蓋也、徐説に、編茅也と見ゆ、

〔源平盛衰記四十二〕屋島合戰附玉蟲立扇與一射扇事

平家ハ兼テ海上ニ船ヲ浮ベ、苫屋形ニ搔楯カキタリケレバ、○下略

〔爲家卿千首雜〕よせかへり浪うつ舟の苫やかたうきねは夢もえやは見えける

〔倭名類聚抄十一舟具〕蓬庫　唐韻云、蓬庫（蓬備二音、和名布奈夜加太）、舟上屋也、釋名云、舟上屋謂之廬（力居反）言象廬舍也、

〔箋注倭名類聚抄三舟具〕廣韻云、蓬、織竹夾箬覆舟、又云、庫、屋庫、並與此不同、玉篇、蓬、船連帳也、庫卑、下

苫

船屋形